

セッションE

「近代オリンピック思想の起源と現在 - 2020 東京大会の理論的批判のために」

報告者：小笠原博毅（神戸大学）、阿部潔（関西学院大学）、鶴飼哲（一橋大学）

討論者：西谷修（立教大学）

世話人：鶴飼哲

第一報告者の小笠原博毅は、オリンピックがかなり以前から、IOC が企図する国際的なスポーツの祭典の枠に収まらなくなった事実をあらためて想起することから説き起こす。2020 年東京大会を控えた日本もその例外ではなく、都市ジェントリフィケーション、多文化共生の政策的推進、「祝賀資本主義」、メディア便乗型の国民動員、そして東北の「復興」、果ては憲法改正にいたるまで、政治経済への縦横無尽な誘導が甚だしく展開されている。それらに合意を与えているのは、オリンピックはもっと「参加型」でいいという主張である。それはオリンピックを、ヴォランティアに限らず、様々なスタイルで「参加」する側の自由に任せて操作される舞台装置にしようということである。

急ピッチのインフラ整備は人命を奪うまでの過酷な労働条件を労働者に課し、招致に関わる裏金問題はうやむやにされ、アスリートのドーピング疑惑は後を絶たないなかで、オリンピックやその直接的当事者の権威を相対化し、出来事を解釈する側の自由な裁量を発揮しようという一見リベラルな構えこそ、オリンピックを「どうせやるなら」うまくやろう、利用しよう、換骨奪胎して楽しもうという気運を後押しするのである。この立場は、オリンピックを開催するという前提を疑うことはない。

こうしたいくつもの舞台の参加者たちの登場が、オリンピックは誰が準備し、誰が主体で、誰が責任をもって開催するのか、そこで起きた事件・事故の責任の所在はどこにあるのかという、予め明らかにされていてしかるべき答えを見えなくさせている。このままでは東京五輪は、必然的に犠牲を引き起こしながら、責任の所在を曖昧にしたまま開催されることは必定であり、反対の意志表示が要請されるゆえんである。

第二報告者の阿部潔はまず、これまで社会学の研究領域では、スポーツ／メディア・イベント／ナショナリズム／身体／産業・ビジネス等の観点からオリンピック研究が蓄積されてきたことを確認する。しかし、圧倒的な資本主義化／マーケット化／スペクタクル化／サイボーグ化のもとで進行するスポーツ・身体・イベントをめぐる現代の変容のもとで開催される今日のオリンピックを分析するには、新たな分析視角が不可欠であることを指摘する。みずからも寄稿した『反東京オリンピック宣言』（小笠原・山本編、2016）には、今後のオリンピック研究に取り組むうえで避けて通れない問いと課題が明示されている。

2020 年東京五輪を考察するには、過去の歴史・政治的な文脈を十分に踏まえた上で、返上された 1940 年大会を含め、それが東京での「三度目のオリンピック」であることを認識する必要がある。過去二回の大会と比較して 2020 年大会にどのような特徴や独自性があるのかを考えるならば、オリンピック開催にともなう「レガシー」が強調されている点は見逃ごせない。大会開催の遙か以前から「オリンピック後」を見据えて「レガシー創出」が声高に唱えられる点は、前回 64 年大会と大きく異なる。

こうした「レガシー」の強調の背後には、現代の日本社会が置かれた政治・文化的な状況が色濃く反映されている。日本特有とされる「おもてなし」の精神をもって「みんな」の参画／協働のもとでオリンピックを成功させようと呼びかける主催者側の姿勢には、たとえそれが現時点では世論の熱狂的な支持に支えられていなくとも、多くの人々のあいだに「なんとなく」分ちもたれ、東京オリンピックという近未来に対して抱かれる「希望」に訴えかけることでナショナルな共同性を作り上げようとする意図が見て取れる。それは従来の研究が指摘してきたスポーツとナショナリズム

の古典的な結託の最新の事例であると同時に、現代に固有な共同性のあり方がそこには垣間見える。オリンピックを契機に喚起／想像／形成される共同性に潜む政治・文化的な意味を仔細に分析することが、今後のオリンピック研究の大きな課題となる。

第三報告者の鶴飼哲は、「復興」「人権」「多様性」など、2020年東京大会のテーマとして掲げられている諸観念の含意を、64年大会時の日本の文学者の発言、近代五輪草創期のフランス人関係者の発言を照合することで分析することを試みた。64年東京大会については多くの文学者が発言を残しているが、三島由紀夫と石原慎太郎が開会式翌日に発表した文章は、当時の若手作家の五輪観を考察する上で貴重な資料である。

三島は五輪反対論にも一理あることを認めながら、五輪開催が敗戦後20年の日本人の精神的「癒し」にとって不可欠だったことを強調する。その一方、西洋起源の五輪の日本開催には文化的正当化が必要であることも認識しており、異教的な聖火崇拝によって古代ギリシャと日本の伝統を架橋しようとする。そこには西洋と東洋の結合による「人類」の和解の実現というヴィジョンが認められる。

石原の文章は端的に「人間自身の祝典」と題されており、「人間」という観念が中心に置かれている。後に都知事として都立学校に「日の丸・君が代」を強制し多くの教員が処分されるという事態の責任者となる石原が、このときには五輪における国旗・国歌の濫用に批判的な立場を示していることは興味深い。しかし、「行為」の枯渇した現代に五輪という「最後の祭典」のみが「人間」の再発見による「癒し」を齎すという論理構造には強烈な能力主義的人間観が現れており、知的「障がい者」に対する後年の差別的言辞の萌芽ともみなしうる。

近代五輪の創設者ピエール・ド・クーベルタンの思想は、先行してスポーツ文化を発展させたイギリスとドイツに対する19世紀末フランスの政治＝文化的危機意識と、古代ギリシャ崇拝の特殊フランス的形態のなかで形成された。「人間」はギリシャで発見されたという観念は彼の著作の随所に見られ、またオリンピズムをひとつの「宗教」とする立場も明確である。第一回アテネ大会を新聞記者として取材した作家のシャルル・モーラスがその経験を通して王党派となり、20世紀フランスの極右運動の指導者となっていったように、1936年ベルリン大会を待つまでもなく、近代五輪はその起源から、危険な政治的衝動の培養器だったのである。

討論者の西谷修は、近代オリンピックの発祥は私的な理想に基づくものだったが、これはやがて実質的には国家的事業となり、第二次大戦後にはいわゆる国際社会をリアルに表象する世界規模のイヴェントと化し、さらに商業メディア化することで、各国の政治（国内・対外）の思惑やグローバル資本の力に翻弄されて、あらゆるレヴェルで多くの問題を生み出すことになったことを指摘する。だがオリンピックのあり方は現代のスポーツそのものを強く規定するようになっている。スポーツ史・スポーツ文化の研究者だった稲垣正浩氏との共同作業を踏まえ、現代オリンピック批判がスポーツの否定ではなくスポーツの救済になることを要請する。近代にスポーツと呼ばれるようになったもの、共同のスペクタクルとして演じられる競技そのものは、人間の共同的な営みの或る特異点をなすものだからであり、それ自体を否定することはできないと考えられる。

現在のオリンピックは、機械的身体観や数値化され評価される運動性能比較に還元され、それが世界の全面的市場システムのなかに組み込まれ、それをグローバルなメディア・イヴェントとして組織し活用する政治的企図によって、アスリートの身体や意志にいたるまで管理運営する機会になっている。この事態を根底的に批判するためには、スポーツとは何かという問い、身体を通して共同で生きる存在にわたる「イヴェント」とは何かという問いを根底に据えて、スポーツの「自律性」を再考ことが求められる。